

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第50号
平成24年4月
生涯学習課文化財係



展示期間
平成24年4月4日(水)
～7月1日(日)
※図書館休館日を除く
※期間中、展示資料の変更を行う予定

乙訓の竹と 西山のくらし

竹は古くから建築用材や茶道具などの工芸品の材料として、京都の町で使われていました。

江戸時代になると、竹が年貢として課せられることになり、この地域の村々は、京都代官の命令で毎年二条城の竹蔵に上納しなければなりません。これらの竹は、幕府が管理する施設の補修や竹垣、川普請の柵・樋、神事祭礼の竹矢来（たけやらい）などに用いられたのです。

江戸時代初めの洛外図屏風みると、集落のまわりが竹林で取り囲まれているようですが描かれています。この竹はマダケかハチクであると考えられていますが、竹と関わりの深いこの地域の特徴がわかります。また下海印寺村のように、西山の柴が年貢として徴収されていた村もありました。

自然とともに……

下海印寺のくらし

下海印寺は明治前期で戸数35戸、人数95人。長岡京市内では比較的小規模な村ですが、西山のみどりと小泉川の清流のなかで、豊かなくらしが営まれてきました。

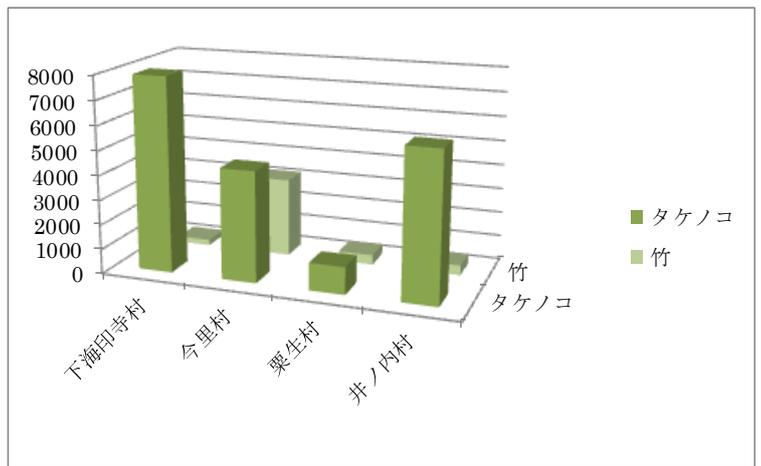


洛外図屏風（神戸市立博物館蔵）



下海印寺の田園風景（平成21年）

下海印寺では、主要作物を米麦におきつつも、タケノコや竹もさかんに出荷されました。明治前期の記録によれば、下海印寺村のタケノコ生産量は7920貫目で、近隣の今里村 4500貫目、井ノ内村の6000貫目を上回っています。明治後半から交通の発達によってタケノコ生産はますます盛んとなり、販売によって得られる現金収入は、農家の暮らしを支えました。



明治前期のタケノコと竹の生産状況（「乙訓郡村誌」による）

寂照院のモウソウチク林が 京都府登録天然記念物に登録されました



寂照院境内の一画に保存されているモウソウチク林 400㎡が、3月に京都府の登録文化財（天然記念物）に登録されました。

明治35年（1902）に発行された『京都府農会報』という雑誌に、宇治黄檗山の僧が中国から持ち帰ったものを、寂照院境内の「大見坊（だいけんぼう）」に植えたとする記事があり、「孟宗竹発祥の地」の伝承をうかがうことができます。

今回登録された竹林は現在もよく手入れされ、古からの竹の特産地として有名な乙訓地域の歴史や、竹栽培の植生がよくわかる場所として評価されました。



寂照院は、平安時代に建立された海印寺十院の一つで、その古い歴史をものがたるたくさん文化財が守られています。背後の走田神社の森はかつて寂照院の鎮守「妙見社」があり、一体となって往時の姿を伝えています。

